

徳淵永治郎. こあまもノ織緯状花粉ノ原形質運動.

植雑 20 : (119)

松村源蔵. 「ムジナモ」採集の記.

博物学雑誌 No.66 : 21 - 23.

<1907>

中井猛之進. みすみいノ新産地. 植雑 21 : (199).

保井コノ. さんせうもノ原葉体ニ関スル管見.

同上 21 : (20) - (24)

<1908>

松田定久. うきやがらノ変種 *Scirpus maritimus* L.

var. *affinis* (Roth.) Clarke ニ就テ.

植雑 22 : (164).

———. さじおもだかノ学名ニ就テ.

同上 22 : (165) - (166).

<1909>

中井猛之進. ほそばみずひきも (新称).

植雑 23 : (163).

牧野富太郎. おにばすハ浮沈ノ両葉ヲ有ス.

同上 23 : (79).

———. くわむ後ニくろぐわむト成りしろぐわむニく

わむト成ル. 同上 23 : (164).

<1910>

中野治房. 中部利根河岸ノ植物生態ニ就テ.

植雑 24 : (27) - (35).

牧野富太郎. しばなハ蓋シしほばなノ略カ.

同上 24 : (67).

———. 浮泛葉アルばいくわも本邦ニ産ス.

同上 24 : (284).

———. こなぎノ葉状. 同上 24 : (320).

———. ふらすもハふらすこもノ誤ナリ.

同上 24 : (343) - (344).

保井コノ. さんせうもノ生活史.

同上 24 : (81) - (91), (123) - (137).

○ 新潟市文化財調査報告書「佐潟の自然—オニバス保護を中心として—」(新潟市教育委員会、1982年3月、67p、非売品)

新潟市南部に位置する佐潟の近況の報告書。特に、オニバスに焦点があてられ、その保護が訴えられている。

周知のように、オニバスは、今、その生育地が激減しつつある植物で、各地でその保護が訴えられている。し

かし、周辺から開発の波が押し寄せる地域で、どのようにすればオニバスを残せるのかという点になると、明確な答が出てこないのが現実だろう。大事にしているつもりでも消えてしまうことがあり、逆に、ずいぶん荒っぽいことをしても、しぶとく繁茂しつづける場合もある。

かつて、岡田要之助博士は、オニバスに関する一連の研究(Study of *Euryale ferox* I~VIII、他)の中で多くの事実を明らかにされた。しかし、多くの問題を将来の課題として残された。私自身も、この2,3年オニバスの調査を進めて、少しなりとも理解を深めたと感じているが、まだ、あまりにも基本的な問題が未解明であるという事実と直面するとともに、ますます研究が進めにくくなりつつある(生育地の消滅、他)という現実には焦りすら覚える。多くの方が、各地で観察された資料を共通の場(この会報でもよい)に出され、議論が深められたらと願わずにはいられない。(角野)

○「ムジナモとその生育環境」(羽生市教育委員会、1982年3月、354p)

ムジナモの日本最後の自生地(天然記念物)であった羽生市宝蔵寺沼から、ムジナモが姿を消したのは1968年のことだった。それ以後、多くの研究者と行政当局の努力により、ムジナモ保護増殖事業が当地ですすめられてきた。この報告書は、その中で取組まれてきた調査結果の集大成である。目次の一部を抜き書きすると次のようである。

II. 宝蔵寺沼のムジナモについて

III. 研究方法および結果

A. ムジナモ増殖に関する研究(1. ムジナモ増殖のための栽培実験 2. 自生地におけるムジナモ、その他水生植物の放流実験 3. ムジナモの生長量と生長速度 4. ムジナモの生長とプランクトン摂食に関する室内実験 5. 食物連鎖を応用したムジナモの食害対策実験)

B. 水生生物に関する研究

C. 水質と水面上の被膜物質に関する研究

D. 宝蔵寺沼の成因に関する研究

IV. ムジナモの保護について